

平成21年8月10日(月)

南条古墳群第5次(3号墳)発掘調査地元説明会資料

1 はじめに

南条古墳群は、7基の小規模古墳で構成される5世紀の古墳群です。現在、地表面に残るのは、今回調査とした3号墳のみです。3号墳は、通称「二校前古墳」と呼ばれ、墳丘が良好な状態で残されています。過去、墳丘の測量調査(1982年)、墳丘東側の範囲確認調査(2007年)が実施されています。その結果、推定径23.5m、高さ3.5mの円墳であること、斜面に葺石を伴うこと、墳頂部は平坦で直径9mを測り、中央に盗掘壕があること、5世紀の須恵器の埴輪を伴う可能性があることがわかりました。今回は、墳頂部に推定される埋葬施設を確認することを主目的に調査を行いました。調査区は、東西7m、南北5mの方形に設定しました。

2 調査で明らかになったこと

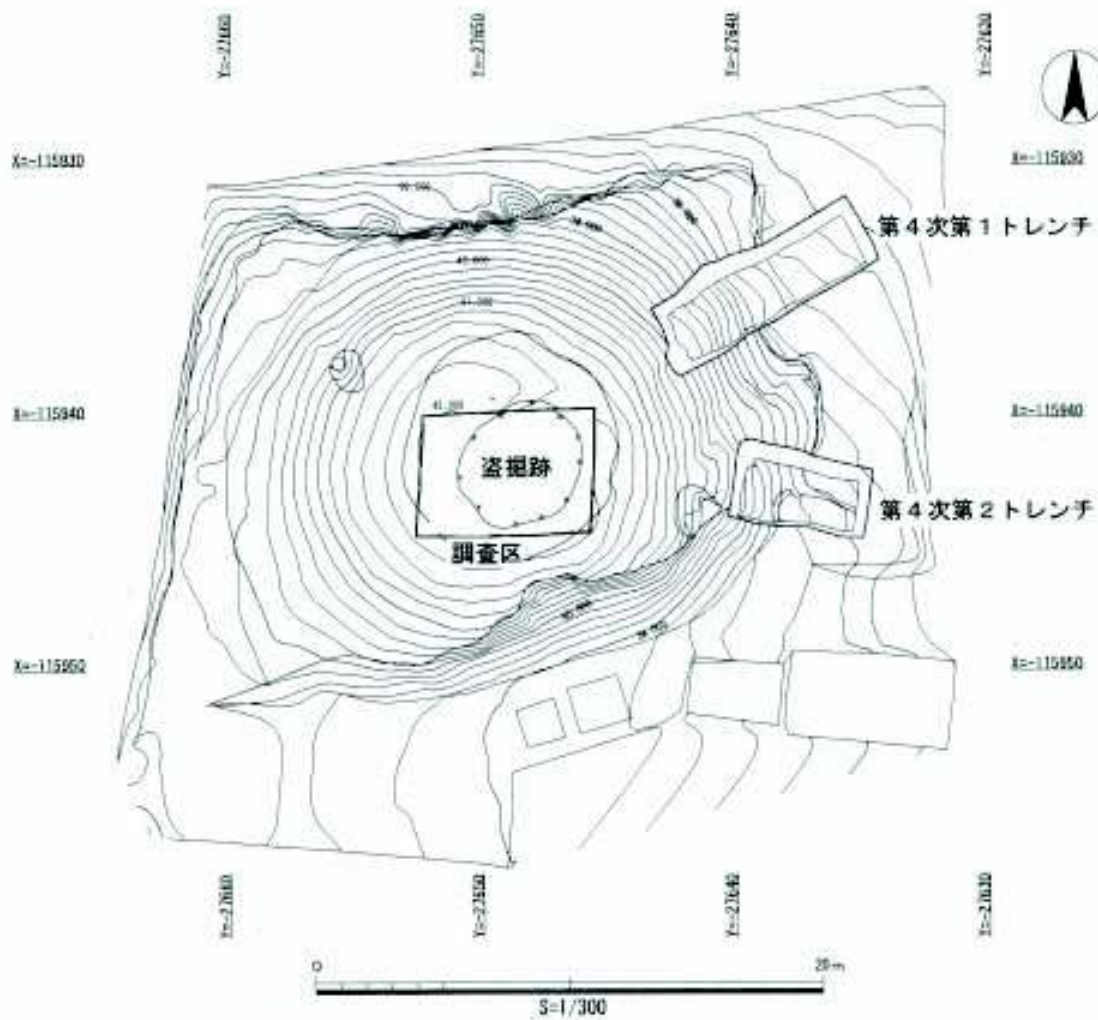
調査の経過 調査前、墳頂部には大きな凹みがあり、盗掘跡と予想されました。地表面を覆う敷土を掘り下げると、後世に動かされた状態の締まりのない墳丘土が凹みとこの西側に堆積していました。この土を掘り下げる過程では、埴輪、須恵器の破片が古代の瓦や寛永通寶とともに多数出土し、古墳を破壊しながら盗掘した跡と判断できました。盗掘壕は径1.5m、墳頂部からの深さ1.5mに及び古代～近世に盗掘されていることが明らかになりました。さらに調査を進めた結果、古墳のほぼ中央部で木棺を埋めた埋葬施設を確認しました。

埋葬施設の構造 古墳のほぼ中央部で長軸を北東-南西方位に向けた長方形の穴を確認し、木棺を納めるための穴(墓壇)と推定できました。その大きさは長さ3.7m、幅2.4mです。内部には、5cm大までの礫をやや多くまじえた細かい土が充填されていました。墓壇の中央部は、黄色系の細粒土が長方形に分布していました。長さ2.2m、幅1.4m、深さ0.35mあり、木棺を納めた痕跡と考えられます。木棺は既に腐食し残っていません。また、どのような構造の木棺であったのかも明らかにできませんでした。

出土遺物 残念ながら木棺内には副葬品が残されていませんでした。盗掘によってすべて持ち去られた可能性があります。しかし、埋め戻された盗掘の土から埴輪(普通円筒形・朝顔形・盾形)、須恵器(蓋杯・壺・器台・甕)、鉄刀1振が出土しました。埴輪には、赤色顔料が塗られたものもありました。おそらく、墳頂に並べられていたのでしょう。須恵器は細片が多く木棺に入りきらない量が出土しています。他の古墳例から、木棺を据えた後、棺の上や墳丘上で土器を破碎する祭祀が行われた可能性があります。鉄刀は、盗掘土から出土しましたが、副葬品であった可能性があります。なお埴輪や須恵器の年代は、5世紀中頃に比定されます。

3 まとめ

今回の調査では、3号墳の埋葬施設が一つの木棺のみを直接埋める構造(木棺直葬)であり、古墳の年代が5世紀中頃とほぼ確実視できるようになったという成果がありました。乙訓地域では、同じ時代の古墳がほとんど消滅しているため、貴重な事例となりました。古墳の規模、葺石、埴輪を伴うことを併せて考えると被葬者は首長層の墓と考えられます。南条3号墳が造営された5世紀中頃は、現在の京都市西京区樫原・山田地域の首長が政治を掌握し、向日市域にいた有力者は小さな方墳や円墳しか造れなかったようです。今回の成果は当時の政治状況や葬制を復原する資料になります。しかし、墳丘の正確な形と規模、段築の有無、埴輪樹立の場など古墳の構造にかかわる情報は今後の課題となりました。これらの点は、今後明らかにしなければなりません。



第1図 南条3号墳調査区配置図



第2図 南条3号墳第5次調査平面図